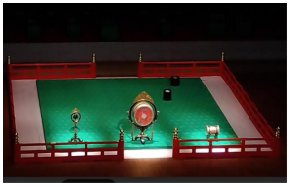
2025 年 1 月 21 日(水)

# 雅楽を楽しむ

18 日(日)午後、東京楽所[代表:多 忠輝]によって『新春の雅楽「源氏物語」』と題する演奏会がルネこだいら(小平市)で開催されました。この日は共通テスト二日目であり「地理総合・地理探究」の問題解説を仕上げなくてはならないハードな時間でしたが、そんな大変さを忘れ、内容の濃い一時を楽しんで来ました（お陰で徹夜になりましたが…)。久しぶりの雅楽鑑賞でしたが、司会･解説担当の野原 耕二さんの軽妙巧妙な話術で新しいこともたくさん学ぶことができました。雅楽の楽器らしい繊細な音と調べ、それに優雅な舞を堪能しました。

世界の多くの民族がそうであるように、日本でも古来より生活文化に根付いた音楽が存在していたと言われています。そこに、中国や韓国からアジア大陸の音楽が伝わり、後に雅楽と呼ばれる独自の音楽が誕生したという訳です。9 世紀中頃、平安時代に成立した雅楽は、弦･管･打楽器という 3 種類の楽器を用いるという点で『世界最古のオーケストラ』として知られており、国の重要無形文化財に指定されています。

平安時代には、天皇や貴族が雅楽を愛好し、「詩歌管弦」として発達したと伝えられています。また、雅楽は単に音楽としてだけでなく、『源氏物語』などの文学とも結びつき、季節感や登場人物の心情や背景を表すものとして活用されて来ました。なかでも第七帖「紅葉賀」で舞う『青海波』は有名で、この日も第一部「管絃」の中で演奏されました。



さて、雅楽は、その後、武士社会が発達する中で廃れて行きましたが、江戸幕府によって奈良・大坂・京都に「三方楽所」が創設され再び隆盛となりました。因みに、江戸末期には大相撲の呼び出しや東西の舞として利用され演じられていました。その名残を現在の大相撲の中にも見ることができます。明治政府に入ると、宮内省雅楽部(現在の宮内庁式部職楽部)が創設され、現在に至っています。ともあれ、楽器紹介から始まり、曲の紹介など話題たっぷりの 2 時間半で幸せな気分のまま帰宅し、それからの仕事へのエネルギー源になりました。